

- I. 原稿募集
- II. 竹尾治一郎 「科学哲学との出会い」
- III. 大西勇喜謙 「国際学会参加報告記」
- IV. 編集後記

I 原稿募集

科学哲学会ニュースレターは2010年からオンラインのみで発行される情報共有のためのニュースレターとして再出発しました。さまざまな研究会の活動、海外の学会の参加報告、ご自分が研究されている分野の最近の研究動向など、情報交換の場として活用していただけると幸いです。ニュースレターに投稿を希望される方は、科学哲学会事務局までご一報ください。

II 科学哲学との出会い

関西 大学
竹尾治一郎

私が科学哲学、分析哲学を自分の専攻分野とするようになった動機ならびに経緯を、以下にごく手短かに述べてみたい。多くは記憶も途切れがちな50年以上前のことで、思わぬ誤伝を残すおそれなしとしない。もちろん文責はすべて私にあることをお断りしておく。

私は文学部哲学科の学生になったとき、寺に住む世話好きの先輩から、哲学をやるからにはカントとヘーゲルのどちらにするかを決めなくてはならない、と言われた。選択肢がカントとヘーゲルだけとは驚いたが、とにかく何かから始めなければならないので、まずはレクラム文庫版『純粋理性批判』を古本屋でみつけてきて独和辞典片手にとりかかった。ところが読み進むにつれ、私には彼の文章はまるで八幡の藪知らずで、どうかすると読者をどこへ連れて行こうというのか見当もつかなくなる。思いあまって先生に打ち明けたら、「カントは読んでいるうちは分りにくい、離れてみるとよく分る」と言われた。半信半疑ながら先を急がないことにして、同時にヒュームを読んでみた。幸いこちらは、私がかねがね関心をもっていた原因結果の関係や「帰納法(前提の内容を超えたことを、確率的に、あるいは前提によって支持されるこ

ととして推理するたぐいの非演繹的推理)の問題」を取り上げ、そのどこが問題かをはっきりと示していた。ヒュームを読みながら思ったことであるが、カントは、「ヒュームによって独断の眠りから覚まされた」と言いながら、後者が問題にしたことには少しも答えていない。因果性は悟性に先天的に備わるカテゴリーであると言われ、帰納推理の基本的仮定であり、ヒュームがその合理性を疑った「自然の斉一性」(未来は過去に似る)の信念は先天的総合判断とみなされて、これもアプリオリな真理となる。帰納推理の合理性を保証する基本的原理を、帰納推理そのものを用いずに示す(示せない)ことが問題のはずだが、それは人間精神に備わる能力を詳しく調べれば手がかりが掴めるということになる。しかしこれではヒュームの問題に少しも答えてはいない、というのが学部学生の辿り着いた結論であった。もちろん問題はその先にあり、正しい帰納つまり「確証」の概念が解明されなければならない。しかし、実際にそれについてどんな仕事か既になされているかを知るまでには、まだ少しひまがかかった。

ここでもう一つ哲学史からの例に寄り道をしておきたい。デカルトは1638年にメルセンヌに

あてた手紙でガリレオの仕事を批評し、後者が自然学の諸問題を数学的に検討することを賞賛する一方で、「彼は自然の第一原因を考察することなしに、ただ個別的結果の理由を求めただけであり、したがって基礎なしに建てた」と言っている。つまりデカルトはガリレオの経験的アプローチを全然評価しなかったのである。この事実在即して言えば、私はデカルトを棄て、ガリレオのアプローチに賛同したことになる。

こうした態度が、当時(1950)の京都大学哲学科では異端視されることは千万承知していたので、私がそれ以上研究を続けられるポストを希望しても無駄なことも明らかであった。私は卒業後、旧制大学院に籍を置いたまま、新制高校の専任教諭を勤め、その余暇に新しく興りつつあった分析哲学を勉強することにした。幸運にも、校長は旧制高校での恩師であり、このような私の勤務態度に寛大なばかりか奨励的でさえあった。おかげで私は日本科学哲学会(1968～)の前身にあたる「アメリカ哲学研究会」の創立(1953)に加わり、以降毎秋の大会に出席することができた。そればかりか、東京にできた新しい友人たちとともに、早稲田大学の植田清次教授編の3冊の論文集(1967～1970)に論文を載せてもらうことができた。またアメリカ哲学研究会創立の翌年、1954年に創立された「科学基礎論学会」にもやや遅れて参加した。

その頃、東京大学・スタンフォード大学の共催になる「アメリカ研究セミナー」が、毎年8月の2週間、東京大学で行われていた。私にとって忘れがたい経験は、1955年および1959年、その哲学部門に参加し、1955年にはデイヴィドソンに、また1959年にはクワインに、直接教わる機会を得たことである。とりわけ私はデイヴィドソンの講義から決定的な影響を受けた。われわれはオグデン・リチャーズとチャールズ・モリスの記号論的な意味論に対する批判的論評から始め、フレーゲ、ラッセル、カルナップの論理の意味論について教わり、さらにその延長線上にあるクワインの意味理論と指示理論の区別を知った後、タルスキーの真理論のかなり詳しい解説に進み、またゲーデルの不完全性定理の考え方についても教わる事が出来た。そしてセミナー最終日は公開講演「倫理学における理性の回復」によって締めくくられた。全体の講

義は分析哲学や科学哲学の基礎となる代表的理論のきわめて明瞭な概観であり、この手ほどきを受けた後では、私は自分が今後進むべき方向について、もはや迷う必要がないと思うようになった。またこの頃には、哲学的分析、言語の哲学、科学哲学の分野での代表的論文を集めた「リーディングズ」も出始めていて、それらを有益に利用することができた。

さらに、1959年9月から翌年7月まで、フルブライト奨学金(旅費)とペンシルベニア大学の奨学金を得て、府教委の好意的な了解のもとに、ペンシルベニア大学へ研究員として出向くことができた。主たる目的は同大学院で、ネルソン・グッドマン教授の指導を受けることにあった。グッドマンには高名な『現象の構造』(1951)の他に数多くのユニークな業績があり、その一つでは、ヘンベルと並んで上記の確証概念の解明を試み、それが構文論的にのみ行われる場合にはパラドックスを生じることを示していた。しかし留学期間の前半はたまたまグッドマンのサバチカルにあたり、ブリストルから招かれたP.アレグザンダー教授が代講した。その際、テキストの一つはマッハの『感覚の分析』であった。(アレグザンダーは*The Encyclopedia of Philosophy*, Vol.5 [Macmillan,1967]にも、筆者の冷静な人柄を示すような、「エルンスト・マッハ」の項目を執筆している。)年が明けて1960年には、グッドマンは講義の冒頭、‘A statement S is about an object k ’の論理的解釈について彼の得た結果を教え、さっそくその理解度についてテストをした。(グッドマンの講義内容は、論文“About”として*Mind*, Vol.70(1961), pp. 1-24に掲載されている。)それが済むとポパーの『科学的発見の論理』(1959)に移り、確率論に入る前の第VII部までを詳細に論じ、続いてクワインの新著『語と対象』(1960)の各章を、受講生に割り当てて報告させ、その内容について論評した。(カルナップに捧げられたこのクワインの著作は、出版に先立ち東京での上記セミナーにおいて、最も基本的な第II章などが読まれ、またそのタイプ原稿が聴講者の間で配布されていた。)グッドマンの講義には、院生以外にも何人かの研究者が聴講していたが、常連のH.ヒーシュのほか、チョムスキーの姿もみられたことが記憶に残っている。また論理学の授業では、グッドマンやクワ

インの協力者でもあったジョーゼフ・ユリアンがボルモチアからやってきて、前期には論理学、後期には公理的集合論(高階の論理学に代るもの)を教えた。論理学はI.M. コピーの『記号論理学』(1954)の第6章「演繹体系」以下がテキストで、一階述語論理の完全性証明までを教わり、公理的集合論では当時出版されたばかりのP. スピスの教科書が用いられた。毎回の最初に、前週に提出した宿題が添削して返され、授業は精力的であるが折り目正しいものであった。哲学も論理学、公理的集合論も、それまで実際上自学自習でやってきたので、初めて受ける正式の教育に、われながら少々興奮していたように思う。

アメリカ留学を終えてふたたび高校教諭に戻ったが、1962年になって思いがけないことに大阪教育大学から専任講師として来ないかというお誘いを受けた。大関将一教授が、渡米前に

『理想』(1956)と『思想』(1959)に載った私の懸賞論文を読んでくださったらしかった。教育と研究のどちらもが職務として公認されるという夢に見た機会が、30歳代後半の私に漸く訪れた。新しく同僚となった中埜肇氏からは、私の任用に対して、「ドクター・コースの修了者でさえ就職先のない者がいるのに」と京大の某先生から叱られた、と聞かされた。

「科学哲学」はもとウィーン学団で「科学の論理学」(Wissenschaftslogik)と呼ばれたものにあたる。その科学哲学との出会いは、私に数々の忘れたい思い出に満ち、出遅れながらやりがいのある研究課題にも恵まれてきた。その思い出はまた、形而上学を排除し、科学と哲学は方法こそ違え目標を同じくすることを頑固に認めない人びとが、時として示す敵意の苦々しさによっても、いっそう忘れたいものとなったようである。

Ⅲ 国際学会参加報告記

2011年3月22日から23日にかけて、私は、ドイツのジーゲン大学で開催された国際学会、The Problem of Relativism in the Sociology of (scientific) Knowledgeに参加させていただく機会を得た。私の専門は科学的实在論論争であり、科学社会学に関する素養は皆無なのだが、科学の社会性は広く知られたことであり、科学的知識の問題を扱う以上、いずれはこうした話題にも取り組みたい。まずは現在の議論がどのような状況にあるのか、見聞を広めることが目的だった。発表者とタイトルは、以下のとおりである。

Maria Baghramian (Dublin) - "Contested Truths, Constructed Realities"

Barry Barnes (Exeter) - "Relativism as an Extension of the Scientific Project"

Martin Endreß (Trier) - "Methodological Relationalism"

Hubert Knoblauch (Berlin) - "Relativism, Meaning and Explanations in the New Sociology of Knowledge"

Richard Schantz (Siegen) - "Realism, Naturalism

and Relativism"

Markus Seidel (Münster/Siegen) - "Karl Mannheim, Relativism and Knowledge in the Natural Sciences - a deviant interpretation"

Harvey Siegel (Miami) - "Is Relativism Really Incoherent? On Some Recent Arguments For and Against"

Students of the University of Siegen - "Theory-Ladenness and Relativism"

ここでは、本学会でのいくつかの発表をご紹介します。現在のドイツでエディンバラ学派系の科学社会学がどのように議論されているのかを、簡単にご報告したい。とはいえ、予備知識の不足に加え、ほとんどの場合、発表は原稿の読み上げ形式であったため、ドイツ訛りやこちら側のリスニング力不足もあり、正確な内容が理解できたとはとてもいいがたい。記述の信頼性はともかく、「こんな話題があるのか」といった程度にご覧いただければ幸いである。

ジーゲンは、ケルンから列車で2時間ほどの

ところに位置する。田舎というほどではないものの、駅前に最新の大型商業施設がいくつかある他は、おもに住宅からなっており、あまり大きな街ではない。起伏の多い土地で、多くの家が丘の上にあるのだが、そういったところでは傾斜を利用して、2階から直接裏庭へ続くようになっており、鮮やかな緑の芝生のうえには、テラスのようなものが設けられている。何という鳥だろうか。朝目覚めたときから、夕方日が暮れるまで、いたるところで心地よい小鳥のさえずりが聞こえる。とても豊かな時間が流れていると感じた。

ジーゲン大学もまた、丘の上にある。本学会が行われた Arthur-Woll-Haus は、アーティスティックな雰囲気の漂うこじんまりとした建物で、大学本体からはやや離れた、丘の中腹辺りにある。それほど大きな会ではなく、手伝いの学生やPDと思われるオブザーバーも含めて、全体で30人弱といった程度だ。ドイツ人の気質だろうか、それともたまたまこの会がそうただけなのか、形の上では「自由な発言」が歓迎されたものの、実際のところはあまりそうしたことは期待されていないらしく、参加者はメインスピーカーたちの議論を黙って聞いている、といった感じであった。それでも会の雰囲気はあくまで和やかであり、隣の控室で供されるおいしいコーヒーや軽食を持ち込んで、リラックスした空気の中で議論は行われた。窓からは、向かいの丘のきれいな街並みが見える。



本学会が行われた Arthur-Woll-Haus. 光を多くとり入れた、アーティスティックな建物である。

本学会の目玉は、いわゆるエディンバラ学派の一人として、David Bloorと共に Strong Programme を推し進めた Barnes による講演であろう。Strong Programme とは、1970年代に Bloor が提唱した研究プログラムであり、科学的知識の生成には社会的な原因が働くことから、間違った（不合理な）信念のみならず、正しい（合理的な）信念についてもこうした社会的原因による説明の必要性を訴えたものである。簡単にいえば、間違った信念が形成された時だけ社会的要因のせいにするのではなく、正しい信念についても同様の分析を行おう、というものだ。Barnes は、彼の提唱する立場、finitism を科学的活動にもあてはめ、科学的知識の使用に関する相対主義的要素を指摘する。finitism とは、彼が Kuhn の著作から影響を受け提唱しているもので、概念（例えば“アヒル”）の獲得に際して我々が触れる個別事例（instance）の数が有限であることから、概念の個々の適用（“これはアヒルだ”という判断）には偶然的な（contingent）側面があり、自然な外延というものは決まっていない、ということ指摘するものである（したがって、経験的主張の真理値の決定には偶然的な要素が含まれる）。こうしたことは、「速度」といった、科学における概念にもあてはまる。本発表でも、Barnes は “How to use knowledge is not determined by knowledge itself” という点を繰り返し強調し、科学的知識の使用に関して同様のことがいえると指摘する。Barnes は、Kuhn のパラダイム概念のなかでも、“model of solution”, “exemplar” としての意味に着目する。こうした模範例は、以後の問題解決におけるパラダイム内での authority となるわけだが、そのような模範的解法の個別事例への適用の仕方というのは、有限の事例からでは一意に決まらず、やはり偶然的な要素が入るといふ。

次に、相対主義と真理との関係に関する発表としては、Schantz のものと、ジーゲン大学学生一同によるものがあつた。前者の発表では、反实在論が相対主義の必要条件であること、真理相対主義は、ある主張の真偽を吟味する際に参照される枠組みまでをパラメータに入れば回避できる（時制論理を例に説明）といったことなどが主張されていたが、後で本人に伺ったと

ころによると、これらの主張の間に特に関連はないようである。また、後者の発表の主旨は、命題的信念となる以前の知覚に関しては理論負荷性の影響がないことから、少なくともこのレベルでの相対主義は免れ、あまりにラディカルな意味での相対主義は理論負荷性からただちに導かれない、というものであった。いずれの発表も、直接科学的实在論論争を扱ったものではなかったため、個人的には少し期待外れという印象を受けた。



会場風景：講演台にいるのが Barry Barnes 教授、スクリーン前で腕を組んでいるのが本学会のオーガナイザーである Richard Schantz 教授。

また、ドイツというだけあり、Karl Mannheim に関する発表も見られた。Mannheim は知識社会学の先駆者とみなされる社会学者であり、20 世紀前半、相対主義に対する代替的研究プログラムとして、知識や思想を社会的文脈に照らして分析する「関係主義 (relationism)」なる立場を提唱した。後の Strong Programme は、こうした分析の対象に精密科学までを含めることで、彼のプログラムを乗り越えるものとして提示された。こうした従来 Mannheim 解釈に対し、異なる解釈の可能性を指摘するのが、Endreß と Seidel の発表である。Endreß は、関係主義に関する Mannheim の議論が、相対主義を支持するものでも否定するものでもなく、合理性の構造に関する議論としてみることで主張する。一方 Seidel は、「Mannheim は精密科学を社会学的分析の対象から外した」とする通常の Mannheim 解釈と、その理由の分析 (nerve, preferability of exact science, non-contingent distinction from human science) をとりあげ、

Mannheim の自然主義 (反基礎づけ主義、相互基礎づけ主義とも) をふまえれば、こうした解釈は不当だという主張を行った。

他方、反相対主義的な発表としては、Baghrarian と Siegel によるものがある。いずれも「相対主義」という言葉の多義性を指摘したものであり、その概念整理を通じて、相対主義に関するある主張の妥当性を検討する、という形式であった。Baghrarian は、「社会構成主義が相対主義につながるか否か」という問題を取りあげ、「何が構成されるか」や相対主義の意味を区別することによってこれを検討したが、結論部では、なぜかそこで行われた区別は用いられず、ネガティブな意味での相対主義 (客観的、精神から独立な、非時間的判断の可能性の否定) とポジティブな意味での相対主義 (この説明は捉え損ねた) という区別を導入し、社会構成主義は、せいぜいネガティブな意味での相対主義にしつつならず、これは懐疑論や観念論に似たもので、特別な面白さはない、と結論づける。

一方 Siegel は、相対主義を導く議論として「非相対的な判断は超越的な視点 (transcendental perspective) を要するが、人間がそのような視点をもつことは不可能である」というものを取りあげ、これが、単に「科学的知識も社会的要因による因果的説明を要する」という無害な意味での相対主義ではなく、「受容と知識の区別を否定する」という強い意味での相対主義を支持する議論として妥当か否かを検討する。彼によれば、「すべての視点を超越できること」と、「与えられたいかなる視点をも超越できること」との区別が重要であるという。前者のようなことは確かに人間には不可能だが、このような理由から導かれる相対主義は、強い意味での相対主義を積極的に支持するとは考えにくい (不整合になる)。他方、後者の意味でなら、幼児の有理数概念 (整数の間に数があること) の獲得や科学の進歩が示す通り、我々人間にもこうしたことは可能であり、上記の相対主義支持の議論は成り立たない。彼はまた、「相対主義は科学によって要請される」という Barnes の主張を取りあげ、ここでいう相対主義が強い意味のものならば、これは例えば、先行する研究プログラム (Merton

学派) に対する Strong Programme の優位性の主張とは相容れず、こうした立場は不整合になる、という指摘も行った。

以上、本学会の主要な発表を駆け足で紹介したが、エディンバラ学派側の発表があり、その前史に関する発表があり、相対主義批判の発表がありと、なかなかバランスのとれた会であったように思う。私としても、いろいろな立場の発表が聞け、大変勉強になった。中でも、今後

の研究を進めるうえで特に有用だと感じたのは、やはり相対主義の多義性に関する指摘である。もしかすると、この「相対主義」という言葉にこめられた様々な意味の色分けにも自然なものなどなく、整理したい問題に相対的に（便利なように）区別がなされているのかもしれないと感じた。いずれにせよ、こうした文献を読む際には、この点に十分注意を払う必要があると思う。

V 編集後記

今回は竹尾治一郎先生と京都大学大学院の大西勇喜謙君に寄稿をお願いし、幸い両方から快諾いただくことができた。

竹尾先生は関西における科学哲学・分析哲学研究の大先達として、わたしも駆け出しのころから科学哲学コロキウムなどの場で大変お世話になってきたが、実は先生の研究者としての生い立ちのようなおはなしは伺う機会があまりなかった。そこで、ニューズレター編集長としての職権を乱用して原稿をお願いすることにした次第である。実際、日本の科学哲学の歴史を知る上でも、竹尾先生のように最初期から関わってこられた方の記憶を掘り起こすことは大事なのではないかと思う。

大西君にはドイツの知識社会学の研究会の様子を報告いただいた。イギリス発の科学知識社会学が現在ドイツでどう論じられているかというのは意外に日本からは見えにくいので、こうした報告も貴重なのではないかと思う。

地震・津波からの復興、原発事故への対処といった問題を日本社会が抱える中で、いろいろな学問分野で緊急シンポジウムが行われたり声明が出されたりしている。科学哲学にも当然こうした問題に関連してできること、言うべきことはあるはずであるが、それは、現場ですぐ役立つもの、というよりは、基本に立ち戻って考え直す、といった作業であるように思う。そうした哲学者らしい貢献のあり方を考える場所としても今後このニューズレターが機能していくことを願っている。

(伊勢田哲治)